

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

■ 出版不況について考える

山岡洋一

一 本が安すぎる可能性

本は安すぎる。だからコストを引き下げるために安っぽい作りになる。コストが実際に下がっているのに、本作りが安易になり、安っぽい内容の本が増える。このため、書籍という媒体の価値が下がり、安くしなければ売れない状況になる。本は、安かろう悪かろうの商品に成り下がる。そうなっている可能性はないか、考えてみたい。

■ 古典を読んでもさっぱり分からなかった人へ

山岡洋一

一 日経ビジネス・オンラインの連載のお知らせ

日経ビジネス・オンラインで、「古典を読んでもさっぱり分からなかった人へ」と題するコラムの連載がはじまった。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

(@は半角文字に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

本が安すぎる可能性

本が売れない。書籍の市場規模は 1996 年のピークから 20%も縮小しているのだから、これは確かな事実だ。売れない理由は何なのか。こう問いかけたとき、確かな答えがあるわけではない。そこで、ひとつの可能性を考えてみたい。本が売れないのは、本が安すぎるからだという可能性である。

ふつうはそう考えないことは百も承知している。値段が高ければ売れ行きが落ちるとというのが書店や出版社の実感のはずだからだ。しかし、だからこそ逆の可能性を考えてみたい。本は安すぎる。だからコストを引き下げるために安っぽい作りになる。コストが実際に下がっているので、本作りが安易になり、安っぽい内容の本が増える。このため、書籍という媒体の価値が下がり、安くしなければ売れない状況になる。本は、安かろう悪かろうの商品に成り下がる。そうなっている可能性はないか、考えてみたいのだ。

本はいま、たしかに安い

必要があって、大正 14 年（1925 年）に刊行された本を読んでいる。竹内謙二訳のアダム・スミス『国富論一』（有斐閣）であり、「定価金拾圓」と書かれている。大正 14 年の 10 円は、いまの何円ぐらいにあたるのだろうか。

昔の価格がいまの価格でどれぐらいにあたるかを計算する方法はいくつかある。だが、それには経済統計が必要だ。大正 14 年のことになると、たいいてい経済統計は役に立たない。そのころから現在にいたるまで発表されている統計がないのだ。そこでやむをえず、他の方法を探してみた。読者にとっての本の価格は収入に対する比率でみるのが適切だと思うので、当時の収入を調べてみた。そのひとつ、大卒初任給をみってみる。現在の大学進学率は約 50%、当時は 5%前後だから、大卒の価値ははるかに高かった。したがって、大卒初任給は一般の賃金水準と比較してかなり高かったはずだが、これを基準にすれば、当時の書籍の価値を高く推定しすぎる誤りは避けられる。だから、本がいかに高かったかを考えるうえでは、そう悪い基準ではないと思える。

現在の大卒初任給はほぼ 20 万円である。大正末から昭和初めにかけては、50 円から 70 円だったようだ。当時の本の価値を控えめに見積もるために、70 円を基準にすると、『国富論一』の定価はその 7 分の 1 にあたる。いまの大卒初任給の 7 分の 1 はほぼ 3 万円である。2007 年に刊行された拙訳『国富論上』は同じ範囲が収録されていて、定価が 3,780 円だ。いまの本としてはかなり高いのだが、竹内謙二訳はその 8 倍にあたっている。

昭和に入ると、いわゆる円本ブームが起こり、文庫のブームも起こって、書籍の価格が大幅に下がっている。たとえば竹内訳『国富論』は昭和 6 年に改造文庫版が発行されており、上巻の定価は 80 銭に下がっている。単行本のわずか 8%になったのである。それでも大卒初任給の約 90 分の 1 だから、現在の価値でいうと、約 2,300 円にあたる。文庫本で 2,300 円だ。2000 年に岩波文庫で発行された杉山忠平訳・水田洋監訳『国富論一』は定価が 860 円だから、竹内訳はその 3 倍に近い。

このように、大正末から昭和初めにかけて、書籍の価格は、低く見積もっても、いまの 3 倍から 8 倍であった。

昭和 42 年（1967 年）の価格

もっと最近の例をみてみよう。たまたま定価が分かる本がたくさんあった 1967 年の例である。このころになると、たくさんの経済統計が整備されているので、当時の価格が現在ならどれぐらいにあたるのかを推計する方法がいくつも使えるようになる。読者の収入に対する比率をみるには、国民所得を基準にするのが分かりやすいはずである。そこで、国民 1 人当たり名目国内総生産を基準にすることにした。

年	国民 1 人当たり名目 GDP
1967 年	448,000 円
2008 年	3,975,000 円

この 41 年間に、国民の所得は平均して 8.8 倍になっているのである。そこで、1967 年の定価に 8.8 倍

を掛ければ、当時の書籍の価値が推計できるはずである。いくつかの例をあげよう。

書名	定価	現在の価値
河出世界の大思想	690 円	6,072 円
河出世界文学全集	690 円	6,072 円
中公世界の名著	480 円	4,224 円
岩波新書	150 円	1,320 円
広辞苑	2,500 円	22,000 円
文庫本	100～250 円	880～2,200 円

河出書房の「世界の大思想」や「世界文学全集」、中央公論の「世界の名著」は当時、かなりよく読まれていたシリーズであり、発行部数が数十万になる場合もあったようだ。それに当時の常識からいえば、480 円、690 円というのは決して高くはなかった（次項を参照）。当時はいまなら 6,000 円もするような本がよく売っていたのである。

文庫をみると、100 頁ほどの薄いものでいまの 880 円、分厚いものだといまの 2,200 円にあたる金額だったのだから、ほぼ 2 倍だったことになる。

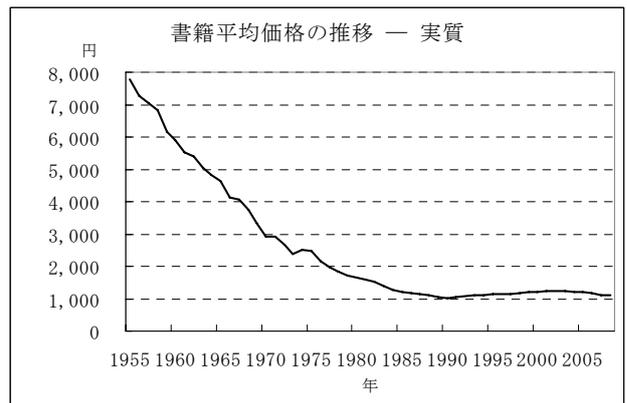
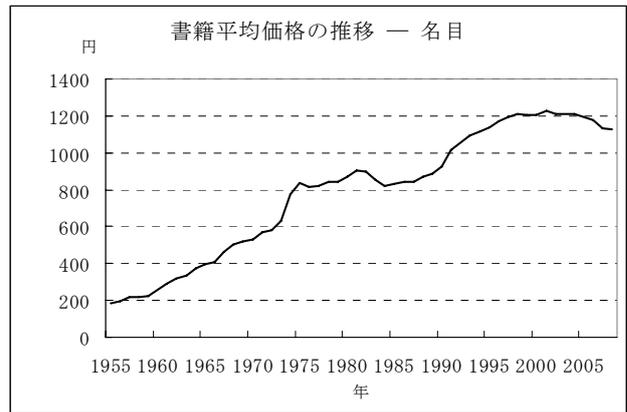
『広辞苑』は現在、普及版で 8,400 円だから、当時は 3 倍に近かったことになる。

以上から、いまは本が随分安くなっていることが分かる。

書籍の平均価格の推移

出版科学研究所が毎年発行している『出版指標年報』に、「部門別平均価格」の表があり、そのうち「書籍」をみると、新刊、重版、注文品を合計した「出回り」の平均価格が分かる。たとえば、1960 年には平均 259 円であり、これは 1 人当たり名目 GDP を基準に換算すると、現在の 5,913 円にあたる。1967 年には平均 464 円であり、現在の 4,067 円にあたる。河出書房の「世界の大思想」の 690 円、中央公論の「世界の名著」の 480 円が決して高くなかったことがこれで確認できる。

2008 年はどうだったかという、なんと 1,125 円であった。1960 年の 20%弱、1967 年の 30%弱にまで下がっているのである。この点をもみても、本がいかに安くなったかが分かる。つぎのグラフをみてほしい。名目ベースと、1 人当たり GDP を基準にした実質ベースで、戦後の本の平均価格がどう推移してきたかを示している。



ここでいう平均価格は、文庫や新書から単行本、豪華本までの「推定発行総額」を「出回り部数」で割ったものである。1967 年には 100 円の文庫本や 150 円の新書があるなかで、平均価格が 464 円なのだから、定価の高い単行本がよく売っていたことが分かる。現在は逆に、2,000 円前後の単行本が多いなかで平均価格が 1,125 円なのだから、定価の低い本が売れていることが分かる。

以上から、戦前と比較して、また戦後の各時期と比較して、本がかなり安くなっているのは確かだと思える。収入と比較したときの本の価格は、いまの 2 倍から 8 倍という時期が長かったのである。

次に問題になるのは、本が安くなったことと、本が売れていないことの関係である。以下ではこの点を考えてみよう。

本が安くなったことの影響

長期的にみたとき、本の価格が大幅に下がってきたことの影響は、直接には、本の体裁の部分にあらわれている。

たとえば、上記の竹内謙二訳『國富論一』はみるからに立派な本だ。箱入り、A5 版、950 ページで、6 センチの厚みがある。前述の通り、大正 14 年

(1925 年)刊で定価は 10 円である。現在なら低めにみても 3 万円にあたる。『國富論一』に収められているのは第 1 編と第 2 編だから、たとえば中公文庫の大河内一男監訳『國富論 I』と同じだ。こちらはもちろん箱はなく、文庫版、604 ページであり、2.5 センチほどの厚みしかない(文庫本としてはかなり厚いが)。現在の定価は 1,100 円である。

竹内訳の『國富論一』がどうしてこれほどのページ数になっているかという、理由は 2 つある。第 1 に、950 ページのうち、本文は 674 ページで、残りは訳者による解説などが占めている。本文は全体の 3 分の 2 ほどなのだ。だが、竹内訳は A5 版なのに対して、大河内監訳は文庫なので A6 版であり、ちょうど半分の大きさしかない。本文だけをみても、竹内訳の方がページ数が多い。もうひとつの理由があるからだ。第 2 に、大きな活字を使い、余白をたっぷりとっている。このため、大河内監訳では 1 ページが 43 字 18 行 (774 字) だが、竹内訳では 40 字 14 行 (560 字) になっている。ページの大きさは 2 倍なのに、文字数は 72% しかない。

さまざまな時期に出版された本をみていくと、大正までは竹内訳と同じように、大きな活字を使い、分厚くて堂々としたものが多かった。昭和に入って活字が少し小さくなり、敗戦直後に極端に小さくなった。紙不足のためだろう。紙不足が解消したはずの高度経済成長期にも小さな活字が使われつづけ、1990 年代になってようやく少し大きなフォントが使われるようになったが、大正時代には戻っていない。

昔は本はみるからに立派であった。値段も高かったが、装丁も立派だし、大きな活字を使って、贅沢に作られていた。本というものは、懐を痛めて買うものであった。買ってきたら、丁寧に蔵書印を押し、机に広げて時間をかけて読む。読み終わった本は書棚に飾っておき、いつか読み返す。新聞や雑誌などは読めば捨てるものだが、本は違う。だから、新聞棚や雑誌棚はないのに、書棚がある。

そういう本がいつか、値段勝負の商品になりさがるようになった。箱入りが常識だった本が箱なしで出版されるようになり、表紙も薄くなり、活字が小さくなり、コストをぎりぎりまで切り詰めていることが一目で分かるものになった。高価な商品だった本が安物になったのである。この点がどのような影響を与えているのかをつぎにみていこう。

媒体が内容を規定する可能性

内容としての著作だけでは書籍はできない。印刷と製本があり、装丁があって、はじめて本になる。書籍とは、内容としての著作と、それを読者に届けるための媒体とを組み合わせたものなのだ。

ここでひとつの問いを出してみよう。本の価値を決める要因として、内容と媒体のうち、どちらが重要なのかという問いである。

無意味な問いだと思えるかもしれない。本が内容と媒体の組み合わせだといっても、重要なのは内容であって、媒体の部分は副次的な要素にすぎない。読む人に感動を与え、マスコミやブログで話題になり、口コミで読者が増えていく状況が生まれるのは、内容が良いときだ。そう思えるはずである。

もちろん、媒体の部分がある意味で重要な意味をもつことは否定できないはずだ。たとえば装丁が美しく、書店でひととき目立った場合、売れ行きが良くなることもあるだろう。また、本文のデザインも読書に微妙な影響を与える。どうも読みにくい本だと思ったら、1 頁の行数と 1 行の文字数が通常よりかなり多かったという経験もある。行間と字間が詰まっていて、余白が少ない本は読みにくい。文字の大きさも重要だ。文字が大きすぎれば読みにくいし、小さすぎると老眼鏡や虫眼鏡が必要になる人も多い。

20 年前にはたとえば文藝春秋などの雑誌すら活版で印刷されていた。つまり活字を使っていたのである。この 20 年に活版はほぼ消えたといっている。印刷会社にも活字はない。まずは電算写植が常識になり、いまでは DTP が常識になった。これで印刷コストがかなり下がった。しかし、コストが下がったことの代償はたしかにある。おそらく読者にはそれほど意識されていないだろうが、活字が消えて DTP が常識になり、本文の美しさが犠牲になっているように思えるのだ。印刷の職人が受け継いできた組版のノウハウが活かされなくなったからなのだろう。この点の影響は目に見えない形で、意識されない形であられる。読書の楽しさが落ちるといっていい。

しかし、そうした点はすべて副次的であり、内容が優れた本であれば、媒体の部分に少々問題があっても読者は読んでくれるはずだ。そう思える。いや、そうであってほしいと思える。

だが、長期的にみれば答えは違っているかもしれない。長期的にみると、本の価格が大幅に下がってきたことの影響は、内容に影響しているかもしれないのだ。

まずいえる点は、媒体が安っぽければ、内容まで安っぽくみられる可能性があることだ。内容は同じでも読者の見方は変わる。違う商品についてみると、理解しやすくなるはずだ。ボージョレ・ヌーボーはペット・ボトル入りが登場して、価格は安くなったが、ありがたみがなくなったのではないだろうか。中身は同じはずなのに、消費者の印象はまるで違う。これと同じことが本でも起こっているかもしれない。本が安くなり、安っぽくなって、蔵書印を押す人もいつしかいなくなり、住宅から書棚すら消えかかっている。読んだ本は新古書店に売るか捨てる。本を大切にしようとする人は減っている。これが現実だと思える。

だがそれだけではない。媒体が安っぽくなったことが書き手や編集者に影響を与え、内容に影響を与えている可能性があるようにも思えるのだ。活版の大きな活字で印刷され、蔵書印が押されて、書棚にいつまでも飾られ、繰り返し読まれる本だと思えば、いまのように著者が本を書き散らすとは思えないし、まして、著者がしゃべり散らしたことを材料に、ライターに書かせた本を出版しようと編集者が考えるとは思えない。時の試練を受けて生き残れる本を出版しようとするはずである。

媒体のコストが下がって、出版のハードルが下が

っているのは確かな事実だろう。その結果、内容が薄い本が多数出版されるようになったのも確かな事実だと思う。とくに、ベストセラーの質が低下したことの影響は大きい。書き手はこの程度のことなら自分でも書けると考えるようになる。編集者も気楽に作った本が売れると考えるようになる。その結果、安っぽい内容の本が増える傾向が増幅されていく。

本という媒体は以前は憧れの的であった。本は高いけれども、好きな本を買うために節約しようと思えるものだった。そういう本を安い価格で提供し、読者層を増やそうというのは、正しい考え方だったと思う。だがその結果、本という媒体は輝きを失い、肝心要の内容まで安っぽくなってしまったのではないだろうか。いま、大量に出版されている本をみると、そう思わざるをえない。

いやそんなことはないというのなら心強い。そう考えるのであれば、実例を挙げて反論してほしい。ほんとうに歯ごたえのある優れた本が安く買えるようになっていくのなら、買って読んでみたいから。

媒体が安っぽくなって、内容まで安っぽくなった可能性が少しでもあるのなら、逆の方向を取る動きがあらわれてほしいと願っている。活版で箱入りの堂々とした本を高い価格で売る。本という媒体の美しさと価値を再確認できるような書籍、一生読んでほしい書籍を出版する。やろうと思えばできないはずがないと思う。

古典を読んでもさっぱり分からなかった人へ

山岡洋一

日経ビジネス・オンラインの連載のお知らせ

日経ビジネス・オンラインで、「古典を読んでもさっぱり分からなかった人へ」と題するコラムの連載がはじまりました。以下の URL にあります。

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/topics/20091125/210584/>

サイトをはじめて利用する場合、若干面倒な「会員登録」が必要になりますが、無料ですので、お読みいただければ幸いです。